

小峯和明著

『説話の言説』

— 中世の表現と歴史叙述 —

竹村 信治

本書は、『説話の言説』を「語る行為（物語）」（Ⅱ「特定の主題（単一ではない）や話型にもとづく叙述」と「説く行為（説示）」（Ⅱ「それを対象化して解釈し批評する意味づけ）」との相関からなりたつ言語行為（叙述）と見、その相関から表現が生まれ、「口頭の語り」と書かれた筆録とが相互に有機的にからみあう、その表現のありようにこそ説話の言説が問われる」とする（一七頁）。ただし、本書の論述は物語論にいう物語内容、物語言説、物語行為の全体における、対象もいわゆる説話の領域を越境する。その意味で、本書は、説話をひとまずの窓口として中世の言語空間に分け入り、『言説』の語に物語内容、物語言説、物語行為の全体を含蓄させることで、中世言説のさまざまな局面を発掘、開示しようとしたものと評すべきであろう。

ところで、『言説』をめぐる問題構制はひろく人文諸科学の研究領野に浸透し、いまや個々の研究成果は、それぞれの研究主体の関心とは別に、『言説研究』の名のもとに集約、糾合されつつあるようだ（もちろんそれにつれて『言説』概念の拡張、曖昧化などの問題も出衆している）。評者もかかる問題構制、展望に関心をよせる一人

だが、この数年、そうした『言説研究』の成果をとりまとめた『日本言説図解大事典』といった著述の出現を夢想している。

『日本言説図解大事典』——、じつはこれは昭和三十年代後半にまとめられた『国語国文学資料図解大事典』（全国教育図書株式会社刊、上巻Ⅱ昭和37年11月、下巻Ⅱ昭和38年10月）をもじった命名なのだが、岡一男・時枝誠記阿氏の監修になった該書は、I 国語・言語生活（A 言語一般、B 言語、C 言語生活、参考編）、II 環境基礎（A 日本自然と歴史、B 生活・思想・慣行、C 政治、D 交通・通信、E 軍事・司法・警察、F 社会・経済、G 衣・食・住、H 建築・美術・工芸、I 芸能、J 記録・文書、K 趣味、参考編）（以上上冊、四七一頁）、III 日本文学史（A 古代文学Ⅰ、B 古代文学Ⅱ、C 中世文学、D 近世文学、E 近代文学、IV 実践資料編（A 国語科教育一般、B 国語科の教育計画、C 国語科学習指導法、D 学力と評価、E 学習指導の実際、F 資料、G 教材、参考資料）（以上下冊、四六八頁）をもつてなる。そして上冊冒頭「編集趣旨」には、「単なる教授資料図書としてではなく、現在の国語・国文学の業績の水準を示すに足るものとした」、国語・国文学を隣接諸科学と関係つけた広い視野において捕らえた資料事典にすることが、本書の目的の一つである」とある。

こうした試みの二十一世紀版、つまりは『国語国文学資料』を言説資料と捉え返し、『隣接諸科学と関係つけた広い視野において』なされる言説研究をもつてした領域横断的な『日本言説図解大事典』、これが評者夢想の中身ののだが、こんな夢物語をあえて披露するのは、小峯氏の『説話の言説』が『国語国文学資料図解大事典』の視界（それは玉上琢弥氏『源氏物語評釈・別巻二』の『評釈事項索引』項目表を勢動させるものでもある）を継承し、これを言説研

究へと転回させ、夢を現実化する上で共有されるべきビジョン、対象資料の広がり、言説分析の手法、中世の言語観や諸観念および特徴的な諸言表、言語事象についての理解などを明瞭に提示、提供しているように思われたからである。われわれは本書につねに立ち返り、事例を加え、補注を書き込み、章立てを拡充し、上代・中古・近世・近代を対象とする言説研究（近代のそれは近年のカルチュール・スタディーズの諸実践のほか、この六月に急逝された花田俊典氏の仕事へ「太宰治のレクチュール」「清新な光景の軌跡——西日本戦後文学史——」など）が一つの範を示していよう）との連携をもちたすことで、いつの日か『日本言説図解大事典』を手にすることができるはずだ（それは書物ではなくT・H・ネルソン「リテラリーマシジョン」（一九八二）にいう「トランスクルージュン」へいま見ているテキスト中の箇所をクリックしてブレテキストを参照するもの）の手法を駆使したハイパー・テキストの形をとることになろうが。

「幻化虚偽の夢中の妄想」、これは小峯氏が「沙石集」を引いて看破した「言説」なるものの正体（八・九頁）だが、本書に領導されてなるハイパー・テキスト『日本言説図解大事典』は、我が国の「幻化虚偽の夢中の妄想」の相関と展開を開示し、言説とともにあるわれわれ自身を見いださせ、われわれをありうべき新たな言説創造へと向かわせる契機となろう。その具体相はすでに本書中に示されるところでもあるけれども、本書がかかる研究の「未来記」としてその展望を拓き、指針たりえている点、特に強調しておきたい。

さて、叙上は本書の「言説研究」としての意義に焦点をあわせて評したのだが、説話研究上の意義については贅言を要せず、各章の基礎稿がすでに斯界で定評を得た論考であるところにそれは証されていよう。説話研究の歴史への批評は第5・18章のほか折にふれ

て開陳され、この四半世紀にわたって研究をリードしてきた小峯氏ならではこの今日の課題が挑発的に示されている。説話集テキスト中心主義を解体し、説話語りの生息、認識論的機能、空間的歴史的作用などを資料に即して実体的に解説して、そこから中世の言語宇宙（コスモロジー）に肉迫すること、概括すればそういったことが提案の要と目されるが、本書では、それらがI「説話の言説」、II「説話の表現」、III「説話と注釈」、IV「説話と歴史叙述」の四部全21章をもって実践される。調査閲覧資料の幅広さ、また、その中から古人の息づかい、情感、思考を聴き取り読み取る聴力眼力、精緻な読解を通じて資料中の言葉の力を賦活し、古人の相貌、声、身体、時代の観念、感性、思潮を汲み上げ掘り下げ再現し、読む者に中世の時空を垣間見させ体験させる筆力、その一々は小峯氏の著述に親しんでいる者のよく知るところであろうが、それらは本書のものでもある。

評者にとって特に興味深かったのは、II「説話の表現」IV「説話と歴史叙述」に小気味よく論述される説話集論、「平家物語」論、「太平記」論。説話集論や個別のテキスト論に収束する研究は氏の繰り返し否定、拒否するところだが、これらの各部各章での論述は、氏のいう「言説」分析（Ⅱ読みⅡ物語内容・物語言説・物語行為の分析）をもってした各説話集、「平家物語」、「太平記」のテキスト解説（Ⅱ生成）として一際光彩を放っているように思う。この二十年の説話研究はたしかに「説話集中心のテキスト論から媒体としての説話言説論への転換」（三六九頁）を果たしたが、「媒体としての説話言説論」は新たな「説話集テキスト論」を可能にしたということか。氏の驥尾について新たな説話集論をめざしたい。